

「私の良心を納得させるために」描く

田中一村
没後30年

昭和33年、50歳の時に「私のゑかきとしての生涯の最後を飾る絵を描くために」全てを捨てて奄美大島に移り住んだ田中一村。

（田中一村）
絨染色工として働きながらわずかな資金を蓄え、亜熱帯の植物や動物を描き、独自の世界を作り上げ、昭和52年孤独のうちに69歳の生涯を終えました。

本年は、没後30年を迎える節目の年。田中一村記念美術館とともに、一村の魅力を紹介します。



© 2007 Hiroshi Niiyama

田中一村記念美術館の紹介



▲奄美の高倉をイメージした常設展示室。

平成13年9月、奄美市笠利町にオープン。奄美空港から車で5分、奄美パークの中にある。

現在、美術館周辺に、一村の絵の世界を再現するため南国特有の植物などを植栽し、「一村の路」として楽しめるように整備中である。

262点の収蔵作品の中から、常時45点ほどを「青年期」「千葉時代」「奄美時代」にわけて展示し、一村の絵と生き方が分かる美術館となっている。

一村の芸術をはぐくんだ奄美の手つかずの自然や人情、独特の文化に触れながら一村の芸術に浸れる。



田中一村の生涯

青年期	明治41(1908)年～ 昭和13(1938)年	栃木県に生まれる。幼い頃から絵に非凡な才能を発揮し、若き [*] 南画家として将来を嘱望される。5歳の時、東京へ移る。昭和15年、東京美術学校（現在の東京芸術大学）日本画科に入学するが約3カ月で中退。その後、南画との訣別を図り、中央画壇とも一線を画す。
千葉時代	昭和13(1938)年～ 昭和33(1958)年	30歳で千葉市に移り住む。奄美に移るまでの20年間、農業をしながら身近な風景や自然を描いた。昭和22年、第19回青龍社展に「白い花」を出品し入選。翌年、自信作「秋晴れ」を出品するが、参考として出品した「波」が入選したことに納得できず「波」の入選を辞退する。これ以降、中央画壇での入選はなかった。九州、四国、紀州を旅行。南国の動植物の魅力に心奪われる。
奄美時代	昭和33(1958)年～ 昭和52(1977)年	50歳の時に奄美に移り住み、絨工場で染色工として働き始める。「5年働いて3年間描き、2年働いて個展の費用をつくり、千葉で個展を開く」という画業10年計画を立てる。59歳からの3年間に奄美時代の主要な作品が制作された。昭和52年9月11日、奄美市名瀬有屋町の借家で夕食の準備中に心不全で倒れ、69歳の生涯を終えた。
没後		昭和59(1984)年、一村の作品がNHKの「日曜美術館」で紹介されると大きな反響を呼び、少しずつ一村の素顔が世に知られるようになる。

※南画/江戸中期以降、南宗画の影響のもとに独自の様式を追求した水墨を基調とした東洋画の画派。

奄美^{もり}の杜⑥〜クワズイモとソテツ〜

1570×830mm



「この作品は誰にも譲れない。

私の命を削った絵で、
奄美^{えんま}閻魔大王への土産品なのですから…」
(一村談)

奄美に移り住んで14、5年経った64、5歳ごろに描かれた奄美時代の最も大きい作品。

奄美独特の亜熱帯性の植物であるクワズイモ・ソテツ・ハマナタマメなどの植物を画面いっぱい大胆に配し、葉のすき間からは空と海を望み、立神も見られる。

茂みの中から明るい空間を透かし見る構図は、奄美時代の一村が最も好んだものである。奄美の自然・風土・植生・宗教を見事に表現した曼荼羅^{まんだら}的作品であり、一村芸術の集大成とも言える作品である。

© 2007 Hiroshi Niiyama

秋晴れ

1735 × 2036mm



© 2007 Hiroshi Niiyama

昭和22年39歳の時、「白い花」が第19回青龍社展に入選したことを喜び、翌年同展覧会に、画号を「柳一村」から「田中一村」に改めて出品した作品。

一村の思い入れとは逆に、参考として出品した「波」が入選したことで、主宰者と激しくぶつかり、「波」の入選を辞退したといわれている。これ以降、中央画壇での入選はなかった。一村の画業を語るにはきわめて重要な作品である。

◎特別展

没後30年記念「初公開 一村が描いた天井画の花々展」

会期 8月17日(金)～9月17日(月)
※9月5日(水)は休館日

会場 奄美パーク・田中一村記念美術館 企画展示室

入場料 常設展の入館料
(大人200円/高校大学生140円/小中学生100円)

◎解説/天井画について

一村を支援していた個人の仏間の天井を飾っていた。昭和24、5年に描かれた作品で、無垢の杉板に顔料を使って40種の花を1枚1枚丁寧に描いてあり、一村らしい鋭い観察力と、的確な表現による見事な作品群である。現在1枚ずつ額装されており、1点1点が見ごたえのある作品である。これらの作品を描いたことが、奄美での作品の基礎となっているともいえる。

本年3月、龍郷町出身で東京在住の実業家が40枚を購入し、そのうちの20点を鹿児島県に寄贈し、残りを寄託された。



© 2007 Hiroshi Niiyama

一村シンポジウム

「これからの田中一村を考える」

～田中一村記念美術館顧問を交えての
パネルディスカッション～

日時 9月16日(日) 午後2時～午後4時

会場 奄美パーク・イベント広場

入場料 無料

パネラー

NHK出版 美術顧問	大矢 鞆音さん
鹿児島県立鹿児島中央高校 教諭	西村 康博さん
鹿児島市立美術館 学芸係長	山西 健夫さん
栃木県立美術館 特別学芸員	山本 和弘さん
田中一村記念美術館 学芸専門員	前村 卓巨さん

コーディネーター

田中一村記念美術館 館長	宮崎 緑さん
--------------	--------

館長のことば



田中一村記念美術館館長
宮崎 緑

琉球と薩摩の狭間で、ウチナーでもヤマトでもない独自の文化を紡ぎ、守ってきた奄美の歴史と、中央画壇に背を向け、世間に迎合せず自らの芸術を求めた孤高の画家の生きた姿勢には、切ないほどに波長の共鳴を感じます。奄美に出会ったからこそ、一村は「村」になれたのではないのでしょうか。美しくも神秘的な奄美の自然を描いた作品の奥に、一村さんの魂が見え、息遣いが聞こえ、さらに神が宿っているような哲学が伝わってきます。「私の作品が悪魔的であろうとヒューマニズムといわれよう構わない」、「50年後、100年後に評価されればいい」と語っていた一村さんですが、今、没後30年にあたり、これほど深い感動を多くの人々に与え、中学校の美術教科書の表紙を飾り、そして、美術館では彼の芸術について本格的な学術研究に着手しようとしています。ここまでたどり着いたのは、島人の皆さんの美を感じる心、温かい人情、豊かな文化の裏付けがあったからこそだと思います。一村さんを通じて奄美を感じ、奄美を通じて「一村さんを感じていただいた時、きっと、心の地平がより拓かれることと信じています。

来年は生誕100年です。ぜひ、奄美で「あなただけの一村」と出会っていただきたいと思えます。

●問い合わせ先 田中一村記念美術館 ☎0997(55)2635